

『おとなの学びを育む
生涯学習と学びあうコミュニティの創造』

「省察的实践者」になる
第一歩を踏み出す
勇気をもらえる

著：三輪建二／定価：6,300 円(本体 6,000 円＋税 5%)
発行：鳳書房／TEL：03-3483-3723



待望の書が出版された。社会教育学者である著者は、成人学習に関心のある人なら手に取ったことがあるであろう『おとなの学びを拓く』(P. クラントン著)、『省察的实践とは何か』(D. ショーン著)の翻訳者でもある。その著者が描く本書のオリジナリティは、わが国における成人学習の実践を基盤にして成り立っていること、また著者が教育現場を俯瞰するのではなく、自身の教育実践とその省察を通して成人学習に関する実践の理論を創り上げていることにある。これまで私たちが参考にしてしている成人教育の方法論は、西洋思想を基盤にしているため方法と成果が明瞭であり、論調に躊躇がない。それだけに魅惑的である。しかし読み進めるうちに、「どこかしっくりこない」という感覚を覚える。今回、著者はわが国の教育や文化に根ざしたおとなの学びに光をあてた。欧米における成人教育を参照し、解釈しながら、わが国の成人学習に実践的に取り組んできた著者だからこそ見えてきたこの道程と展望は、日本の成人学習のありようをグローバルな視点から無理なく映し出してくれる。

看護教育に目を向けると、私たち教員は、臨床看護の事象は一回性であり、その構造は各人が生きる時空間の関係により絡み合っていることを了解している。そのため、看護学教育では「ふり返る」ことで学ぶことを重視し、それを導入している教

員も多い。しかし私たちは、その根源的な問いとなる看護学を「学ぶ」とは、それを「省察」し「実践に生かす」とは、また「学習支援者としての教員」とはなど日常化した教育実践に問いを立てることを中断し、勇往邁進してはいないだろうか。例えば、学習支援者の役割に「消極的なファシリテーター」がある。そこでは聴くこと、待つことといったパトスの態度が核となる。私たちは学生の感じる力、受け取る力を重視しながらも、性急に結論をださせようとしたり、過度な説明をして学生が考える機会を奪ったりしてはいないだろうか。

本書を読むと自らの実践に問いを投げかけられているように感じる。それは、その文体ゆえではない。著者が自らを教育者であり学習者であることを自覚的に実践、省察、さらに研究へと繋げていく志を、惜しみなく表現しているからであるように思う。穏やかな著者のまなざしは、考える主体は私たちであることへ、学生と向き合う学習支援者としての省察と実践を通して「教えること」を学ぶことへ、それを個の学びとせず持続可能な組織的な学習となる実践の場へと招喚する。自らの実践を振り返ることこそが、現状を内破する最大の推進力となり得る。それが専門職教育に必要な「省察的实践者」の姿であり、成人学習者の姿でもある。その一歩を踏み出す勇気を貰える一冊である。